

# 臆病なカナリア

*A i n a & S b i n g o*

---

倉多 楽

*Raku Kurata*



エタニティ文庫

## 目次

臆病なカナリア

5

書き下ろし番外編

鳥籠とりかごと止まり木

325

臆病なカナリア

## 1

別に狙ってたわけじゃない。

中戸愛菜が、彼に声をかけたのは、本当に偶然が重なった結果だった。

元彼と別れたダメージがようやく薄れてきて、別れの原因を自分なりに考えられる程度には心が落ち着いてきた、ある冬の日。

たまたま彼に会った。

お互い連れもなく、一人きり。

そのタイミングで、ふと自分らしくないことを思いついた。

そして、酒の勢いを借りて彼に声をかけ——ラブホテルに誘った。ただそれだけのこと。

シャワーは先に浴びた。

入れ違いにバスルームに向かう彼の背中を見送る。一人になると、ブルリと背筋が震

えた。

『本当に良かったのか』なんて疑問が頭の中で渦巻く。だけど、今更だ。ここまで来たらもう戻れない。

少しの間、別人になり切ればいい。そして、自分一人では答えの出なかった悩みを解決する糸口を見つけられたら、今夜のことは全部忘れよう。うん、行きずり上等。

だから落ち着け、大丈夫だ。

彼を待つ間、室内をうろろしながらそう繰り返す。

そのうち、愛菜はベッドに腰掛けた。なんとなく手持ち無沙汰で、テレビのリモコンに手を伸ばす。無造作に数回押すと、アダルトチャンネルが映し出された。

画面の中、気持ち良さそうに肢体をくねらせて喘ぐ女優をぼんやり眺める。

元彼の言葉がふと脳裏を過った。

『なんでいつも黙ってんの？』

『お前、ほんとに反応薄いよな』

……元彼にしてみればきつと、こういう風になってほしかったんだろうな……なんて。それこそ今更だ。

「AV観ながらするのか」

斜め後ろから声をかけられて、のろのろと振り向く。

次の瞬間、腰にタオルを巻いただけの男性の姿にギョツとしたが、慌てて表情を取り繕った。

相手の格好をとにかく言うつもりはない。『シャワーの後は服を着ないで』と頼んだのは愛菜だし、自分もバスローブしか身に着けていない。

男性はミニバーから水のペットボトルを取り出し、こちらに視線を向けたままそれを啣る。

愛菜は目を合わせられず、男性の喉仏が上下するのを見ながら答えた。

「いえ……別に」

どうにもいたたまれない。品定めでもされているように感じるのは、自意識過剰だろうか。

騒ぐ心臓をどうにか静め、何でもない風を装ってテレビの電源を切った。色っぽい女優の喘ぎ声がプツンと途切れる。

男性は、大して興味がなさそうにふうん、とだけ返す。今の行動に違和感は覚えなかったみたいだ。

ペットボトルを無造作にテーブルに置く音が、妙に大きく響いた。

——彼の名は湖西。

本人から聞いたわけじゃない。愛菜は以前から彼のことを知っていた。

愛菜と同じ会社に勤める湖西は、女性に「人気がある」ことで有名だった。彼の華やかな噂は、他課に所属する愛菜のもとにも流れてくる。たくさんの女性とお付き合いしてきたブレイボーイ。

噂好きの同僚が、社員食堂で『湖西ってあの人だよ』とわざわざ教えてくれたのは数ヶ月前のこと。噂話に疎い愛菜も、それまで自分の所属する課に時々訪れる彼の姿を見たことがあったので、顔だけは知っていた。

彼の顔と名前が一致したときは妙に納得した。『ああこの人が、なるほどねー』と。

同僚の話によると、彼は愛菜より五歳上の二十九歳。

けれど愛菜の目には、自分の課の課長と堂々と議論する彼の姿は年齢よりも大人びて見えた。入社三年目にしてようやく直属の主任や係長と落ち着いて話せるようになった自分が、五年後、あんな風に管理職と渡り合っている姿なんて、とても想像できない。

彼に尊敬のごとき興味を抱くと同時に、その整った容姿へも意識を吸い寄せられる。綺麗だな、この会社にも格好良い人がいたんだな、と美術品を鑑賞するように彼を見ていた。

涼しげな切れ長の目に、スツと通った鼻筋。薄い唇。

愛菜は自分が面食いであることを自覚している。

といつても正統派のイケメンは苦手で、映画やドラマでたとえるなら、誰からも愛される主役よりも、話の核心を握っていたり裏切りフラグが滲<sup>じ</sup>んでいたりする準主役級の落ち着いたイケメンの方が好きだ。

そして湖西の顔は、そんな愛菜の好みにガッチリ嵌<sup>はま</sup>っていた。派手な噂<sup>うわさ</sup>が付きまとう割に、いつも禁欲的な無表情というギャップも、余計に彼を魅力的に見せているのかもれない。

……湖西はきつと、愛菜の顔も名前も知らない。一日中デスクワークをしている他課の一般社員なんて、いつも綺麗な女性社員に囲まれている彼の視界には入らないだろう。でも——ううん、だからこそ好都合。

ここにいる自分は、湖西とはなんの繋<sup>つな</sup>がりもない女。気まぐれで逆ナンパしただけの、ただの女。

……それでいい。そうじゃないと困る。

ルームライトの明るさを調整して、彼は愛菜の待つベッドに近付いてきた。  
大きな手で愛菜の頬をサラリと撫<sup>な</sup>でる。

「キスはしていい?」

「いえ」

「……そう」

質問に首を振り、愛菜はベッドに上がってきた彼の肌に触れる。

程よく引き締まった男らしい体軀<sup>たたく</sup>。異性の身体は元彼のものしか知らないけれど、湖西の筋肉は元彼よりも硬い気がする。仕事の合間にジムかどこかで鍛<sup>きた</sup>えているのかな。

そんな噂は聞いたことがないけれど、女性の人気を得るために身体作りしている可能性はありそうだ。

「……ここ、触ってもいいですか?」

あぐら 胡坐をかく彼の長い足の間に陣取りながら問いかけた。

指先で鳩尾<sup>みぞおち</sup>をなぞり、腰のタオルを軽く引っ掛ける。

……緊張しているなんて気付かれたくない。ここにいるのは、街で簡単に男に声をかける気安い女<sup>め</sup>であつて、ナンパもラブホも初めての女<sup>め</sup>じゃない。

どうにかここまでこぎつけたんだ。彼が途中で萎<sup>な</sup>えてしまったら困る。次にいつ似たようなチャンスが訪れるか分からないし……いや、多分こんな僥倖<sup>えいひょう</sup>は一度きりだろう。女性慣れしてそうな男性の心当たりは、彼ぐらいだ。全く見ず知らずの男性に同じことをする勇気は、さすがに持ち合わせていないし。

そうは思っていないでも、焦りと不安と緊張で全身がガチガチに固まっているのが分かる。そのことを悟られたら、それこそ彼は愛菜を抱く気をなくしてしまうだろう。

だから、……最初はこちらが主導権を握る。

彼の余裕をどこまで奪えるかは分からないけど、何もしないよりはマシなはずだ。湖西からの返事はない。

こちらの様子を窺っているようだ。

経験豊富な彼は、女性から奉仕される機会も多いのだろう。お手並み拝見、とても思っているのかもしれない。

……口淫の手ほどきは元彼から受けた。鍛えられたといってもいい。

元彼との付き合いが終わりに近付いた頃は、一つに繋がるよりも、手と口で奉仕することの方が圧倒的に多かった。

セックスより口淫を強請る原因は、愛菜にあると、あの人は言っていたけれど——  
掌を柔らかく押し当ててタオル越しに彼に触れる。ソフトタッチで撫でていると、そこが緩く勃起上がり始めた。良かった……少しホッとする。

お願いした通りの姿でバスルームから出てきたからその気満々なのかと思っていたのに、ベッドに上がった彼からはそんな様子が感じられなかったので、実はちよつと焦っていた。

タオルを取り払い、それにそつと手を添える。

愛菜はじわじわと熱を持ち始めた股間に覆い被さった。

いきなりは唾えない。口の中の唾液を塗りつけるように、舌を這わせていく。

側面と裏筋を大きく舐め上げ、くびれは舌先を尖らせてくすぐりながら……それが彼女に口淫を教えた男の喜ぶやり方だった。

湖西はどうなんだろう。

男の人が全員同じところで感じるとは思わないけれど、手で支えているものは、時折ピクツと震えている。……反応するってことは気持ち良いのかな。

「……っは、……」

頭上で熱い息が零れた。彼の吐息に後押しされて、根元から先端まで舌を何度も行き来させる。滲み出た先走りは、指の腹で先端に塗りつけた。唾液と混ざって滑りの良くなったそこを、指と舌でさらに攻めていく。

頭上から湖西の視線が注がれるのを感じる。

直接的な刺激だけじゃない、男は視覚でも感じるものだ——以前教えられたことが頭の隅を過る。

奉仕する自分の姿に湖西も興奮しているのだろうか。

そろそろかな。

頃合いを見計らって、ねつとりと舐めていた切っ先をジワジワと口内に招き入れた。

「……っ」

……これ、大きくない？

喉元ギリギリまで呑み込んだのを少し後悔した。

苦しい。手で擦っているだけでかなり大きくなっていたのに、唾えたらさらに質量が増してしまった。

嘔吐きそうになるのを必死で堪えた。涙が滲む。

なんだろう、悔しい。何故か分からないけど、負けた。気分が膨らんでいく。

謎の敗北感を打ち消すように愛菜は全力で彼の欲望を煽った。

先走りか滲む先端は口で、根元と後ろの膨らみは指と手で、それぞれ違った刺激を与えていく。緩急をつけて弄り倒しながら、わざと濡れた音を響かせた。

シャワーを浴びた直後だからか、臭いは全く気にならない。彼が体臭のキツイ人じゃなくて良かった。

……こんなことを考えながら口淫するなんて不純かな。いや、そもそも会ったばかりの相手とホテルに来ている時点で、純粋なはずがない。

「……っ……もう、いい」

不意に頭に重みを感じ、涙目のまま見上げた。

湖西が大きな手を愛菜の頭に置き、真っ直ぐこちらを見下ろしている。その掌はひど

く熱を持っていた。

彼の手がスリりと愛菜の頬に流れる。掌だけじゃなく指先まで熱い。愛菜は唾えていた屹立からそっと唇を離す。最後に先端をチロリと舐めた。

「——っ！」

彼の尻が色つぼく歪む。

その表情に魅せられた次の瞬間——四つん這いになっていた身体を抱き起こされ、視界が大きく反転した。

仰向けになった愛菜の顔を湖西がジッと見つめてくる。彼と視線を絡ませるのが怖くて、瞼を閉じ密やかに息を吐く。

……いよいよだ。試される、いや、自分を試すときが来た。

緊張のあまり冷えていく指先で、ギユッとシーツを掴む。けれど、すぐに指の力を抜いた。

今夜の愛菜は、場慣れした女だ。固くなっているのは怪しまれる。躊躇うのも駄目だ。自分から誘うくらいしななれば。

目を開け、彼を見上げながら囁く。

「はやく……愉しませてね？」

声で裏返りかけたのを誤魔化し、無理矢理笑顔を作った。逞しい肩へ指先を滑らせる。



彼の肌は愛菜よりもずっと温かい。

彼が一瞬、唇を引き結んだ。

「……できるだけ優しくする。もし辛かったら言って」

「っ……………！」

髪を梳くように撫でられたかと思うと、精悍な顔が迫ってきて頬に軽くキスされた。彼の言葉の意味が理解できない。

誘惑したつもりだったのに、労られた？

もしかして、愛菜が何を考えて彼をベッドに誘ったのか見透かされてる——？

「っ、あの」

「ん？」

「……………いえ」

なんでもない、と首を振った。

まさか。考えすぎだ。超能力者でもない限り、出会ったばかりの相手が心の奥で何を考えているかなんて分かるわけがない。

彼はそんな愛菜を静かに見つめ、小さく息を吐く。

大きな手がバスロープをそっとはだけさせ、晒された素肌に長い指が滑る。肩や鎖骨を辿る指の後を彼の唇が追い、あちこちにキスを落としていく。

腰から臀部、太腿まで下りた手が、脇腹を撫でて上へと戻った。そして胸の形が崩れなくらいの柔らかい触れ方で膨らみを揺らす。

愛菜の肩が反射的にピクツと跳ねた。

緊張と戸惑いで強張っていた身体が、優しい愛撫で少しずつ解れていく。

しばらくの間、くすぐるような彼の手つきに身を任せた。

じっくり時間をかけたからだろうか。いつしか肌は彼の愛撫に物足りなさを覚え始める。しかしそれは彼にとって想定内……いや、それが狙いだったようだ。

一つ息を吐いた彼が動きを変える。じわじわ湧き上がってきた焦れつたさを訴える間もなかった。もたらされる快感が唐突に鋭さを増す。

「……………っ！」

耳、鎖骨、脇腹の一点。

暴かれた敏感な部分ばかりを狙って指が這う。

丁寧に全身に触れていたのは、感じる場所を探っていたからか、とようやく気付いた。けれど気付いたところでどうにもならない。

肉厚な舌が首筋を舐め、指先は胸の頂を転がし、弄ぶ。

鮮烈な愛撫を同時に何箇所にも与えられて、愛菜はあつという間に快楽に呑まれた。膨らみの先端が音を立てて彼の口に吸い込まれる。熱い粘膜の中で舐め回され、キュ

ウツと吸い上げられた。

震える内腿を熱い掌が這う。足の間に潜り込んだ指先が、淡い茂みをかき分けて秘された花芯をくすぐった。

鋭く息を呑む。身をくねらせても逃げ切れない。彼はもう手加減する気はないらしい。秘裂の浅いところを撫でた指が、蜜のぬめりを帯びて中へ滑り込む。

乱れた二人の息遣いに卑猥な水音が重なった。

直接触られる前からそこが熱く潤んでいたことを教えられ、全身が羞恥心でカアツと火照る。

喉を反らして悶えている間に、秘裂を探る指の数が増えた。クチュクチュと響く音に煽られる。背が反り、腰が揺れた。体内が熱く疼いて堪らない。

……甘い責め苦はそれからもしばらく続いた。時間の感覚はもうない。

彼が愛菜の太腿を抱え上げたときには、既に腰が砕けていた。

「……っ……ゴム……」

はあはあと荒い呼吸を繰り返しながら、短い言葉を懸命に絞り出す。同じく息を乱した彼が愛菜の手を自身の下腹部に導いた。

……触れた瞬間、思わずウツと息を詰める。

既に付いていた。いつの間に。

一瞬我に返った愛菜の隙をつくように、彼が腰を進める。屹立に愛蜜をまとわりつかせ、凶暴な切っ先をじわじわと体内に沈めていく。圧迫感が襲ってきたが、内壁はそれまでの愛撫で蕩け切っていて、痛みは感じない。

彼は熱い猛りを全て中に収めると、大きく息を吐いた。

「……すごいな」

掠れた眩きが耳に届く。愛菜は彼を見上げた。

——その、表情に。

魅せられる。

直後、ゆるりと揺さぶられて、背筋を快感が駆け抜けた。

彼に与えられたのは、人生で一番濃密な時間だった。けれど——  
結果を言えば、失敗だった。それも、大のつく。

ちなみに、彼は全然悪くない。最悪な結果を生み出した原因は、愛菜自身だ。

彼は……とても丁寧を抱いてくれたと思う。少なくとも元彼よりは断然。それは言い切れる。

全身をくまなく愛撫してくれたし、褒め言葉で気分を盛り上げてくれた。耳や脇腹が

感じるなんてことも初めて教えられた。……でも。

声は出なかった。

いや、……出せなかった。

二年以上も前に別れた元彼に貼られた『喘げない女』の悪評。レポレム。

それはもしかしたら自分のせいじゃなく、彼のおざなりな抱き方のせいなんじゃないか、なんて考えていたのに。

女性の扱いに長けていそうな湖西が相手なら喘ぐことができるかもしれないと思って彼を誘い、その手に身を委ねても、喉から出るのは乱れた呼吸音だけ。結局可愛い声は最後まで一度も出せなかった――

愛菜の中で果てた湖西が、しばし荒い呼吸を繰り返した後でゆっくりと起き上がる。汗の滲む熱い身体が離れると、二人の間にひんやりした空気が流れ込んだ。

情事の余韻を楽しむ気になんて到底なれない。人形のように黙って組み敷かれる愛菜に、湖西が満足したとはとても思えなかった。情けなさど自己嫌悪が胸に重く積もっていく。

愛菜はゴムを処理する彼の背にひと声かけて、逃げるようにバスルームに向かった。熱い湯を浴びても、どん底の気分は流せない。沈んだ気持ちが出ないよう、表情を精

一杯取り繕って部屋に戻った。湖西にもシャワーを浴びるよう促し、彼が汗を流している間に手早く服を身に着ける。一人になると、またうっかり顔が歪みそうになる。

室内の自動精算機で会計を済ませたタイミングで、彼がバスルームから出てきた。

泣きそうな顔なんて見せたくない。セックスした相手が暗い顔をしているなんて、男性にとつては不快でしかないだろう。だから、

「ありがとうございます」

と、できるだけ穏やかな声で言って頭を下げた。バッグを持つ手が震えているけど、距離があるから気付かれないだろう。

湖西が何か言う前に踵を返し、そのまま扉に向かう。けれど、ノブを掴む直前に、湖西に手首を掴まれた。

「……これからも会ってくれないか」

沈黙が落ちる。

何も言わない愛菜に焦れたのか、彼がもう一方の手を肩にかけてくる。

愛菜は全身を強張らせ、無言で首を左右に振った。

どうしてそんなことを言うのだろう。

ひよっとして、私が満足してないと思ってる？

私が態度を誤魔化せなかったから、男としての自尊心を傷つけてしまった？

二度目を要求してくるってことは、もしかしたら今夜は湖西にとつて相当不本意なひとときだったのかもしれない。彼が噂通りの百戦錬磨な男性なら、ベッドで反応の薄かった愛菜に対して『今度こそ感じさせてやる』なんて考えているのかも——

それだけ不快にさせてしまったかと思うと申し訳なくて、俯いたまま振り返った。せめてものお詫びのつもりで彼の胸板に額を付け、もう一度小さく首を振る。

こんな面倒臭い女に付き合ってくれてありがとう。  
これで充分、二度目は必要ない。結論が出たから。  
振り回してごめんなさい。

「素敵な思ひ出は、一夜限りだからいいんですよ？」

この場面で本音を吐き出すのは自分に酔っているみたいで嫌だし、何より彼に失礼だ。だから遊び慣れた女性になり切つて、軽薄な台詞を絞り出した。

声が震えなかったことにホッとして、自然な笑みを作つて顔を上げる。

感情の見えにくい湖西の顔から怪訝そうな気配が滲む。けれど、これ以上どう取り繕つていいのかわからない。愛菜は顔に笑みを貼りつけたまま、肩に置かれた手をそつと外して言った。

「さよなら」

「来週の同じ時間にまたあの店に行く、だから——……」

追いかけてくる低い声を最後まで拾うことなく、愛菜はその場を後にした。

## 2

「なかちゃん、お昼どうする？」

昼のチャイムが鳴り終わると、斜め前の席から話しかけられた。愛菜はディスプレイから目を離し、背伸びをしながら声の主に笑顔を向ける。

「中戸」を一文字だけ略して呼ぶ女性——安倍花緒理は、愛菜と一番仲の良い女性社員だ。

一年先輩の彼女は、愛菜の中では、頼れるお姉さん的なポジションにある。整った顔を引き立てるオフィスメイクや髪型はもちろん、おしゃれな私服も、それを着こなすスタイルも完璧。おまけに面倒臭い顔が良くて、仕事もできる。そんな彼女は、愛菜が思い描く理想の社会人そのものだ。

「コンビニで買って来たからここで済ませちゃうよ」

「えー、今日も社食行かないの？ 木曜のA定、なかちゃん好きでしょ？」

綺麗に巻いた髪を手櫛で整えながら、安倍が小首を傾げた。

この会社の社員食堂はかなり美味しい。特に曜日ごとにメニューが替わる定食は、愛菜のお気に入りだ。

A定食はポリウムのある丼物で、B定食はご飯にみそ汁、メインのおかずの他に小鉢がいくつか付いている。前者は男性向け、後者は女性向けとして用意されたメニューなのだろう。

ちなみに木曜のA定食は親子丼。愛菜にとっては量は多めなのに、いつも最後まで平らげてしまう。とにかく美味しく箸が進むのだ。

「急ぎの仕事？」

「ううん。社食の気分じゃないだけ」

あの鶏肉と卵と出汁の絶妙な加減を思い出すと、途端に恋しくなってきた。でも我慢だ。もし湖西に会ったら気まずい思いをするだろう。

今はまだどうしていいか分からない。彼との間にあった出来事が自分の中で沈静化するまで、愛菜は彼と接触する可能性のある社食は利用しないつもりだった。

「……会いたくない人がいる、とか？」

考えていたことが顔に出たのか、そのままズバリの指摘を受けた。冷や汗が噴き出す。思えば、勘の鋭い安倍がここ数日の愛菜の変化を見逃すはずがなかった。

木曜日はお腹を空かせておくのが愛菜の鉄則だ。他の曜日にも安倍達とB定食や麵物を

食べに社食に行くのがすっかり習慣化している。その愛菜が、先週末からお昼持参で出社するようになったのだ。

むしろ今まで尋ねてこなかった方が奇跡かもしれない。もしかしたら気を遣ってくれたのかも。

「そんなんじゃないよ」

否定の言葉は思ったよりすんなり出てきて、ホッとする。

けれど相手の目には不審に映ったらしい。即答したことがかえって怪しかったようだ。机の向こうから投げかけられる意味ありげな視線を、引きつり笑いでどうにか流す。

「でも、なかちゃん……」

「あ、ほらっ、安倍ちゃん、急がないと席埋まっちゃうんじゃない？」

安倍の言葉を遮って促す。

ちょうどそのとき、同じ課の女性社員、真野と堀田が二人揃ってこちらに近づいてきた。

真野は、愛菜と同期。入社して早々に社内では彼氏をゲットしたことで話題になった子だ。新人の頃は挨拶ぐらいしかしない仲だったが、話してみると意外に話が合った。

堀田は派遣社員で、愛菜の三歳上。四人の中では最年長だが、いつもテンションが高くてはしゃいでいるせいか、業務から離れた場では年齢よりも幼い印象を受ける。

二人とは安倍を介して仲良くなった。最近では、昼休みになるとこの四人で行動することが多い。

なおもチラチラとこちらを窺ってくる安倍と、その様子を見て首を傾げる真野達に「行つてらっしゃい」と手を振って、コンビニの袋をガサガサと探り始める。

会話を切り上げたいと言わんばかりの愛菜を見て、安倍は盛大に溜息をついた。

「行ってくる。……いつか教えてね」

「……うん」

「……ってことは、やっぱり気分の問題じゃないんだ」

こちらがウツと詰まると、向こうが噴き出したのはほぼ同時だった。顔を上げた愛菜に小さくウインクを寄こして安倍が席を離れる。

三人の背中を見送ると、今度は愛菜の口から重い溜息が漏れた。

「はあー……」

溜息をつく和幸福が逃げると言うけれど、今の愛菜からは幸せどころか魂まで抜け出してしまいそうだ。

モゴモゴと頬張ったおにぎりをペットボトルのお茶で流し込む。

ここ一週間で、それまであまり縁がなかったコンビニの商品にすっかり詳しくなってしまうた。

……そう、今日で一週間。

湖西と関係を持ったのは先週木曜の夜だった――

彼は愛菜の想像通りの男性で、それでいて想像とは違ったところのある男性だった。想像通りなのは無表情なところ。

どんな場面でも彼はいつも表情を崩さない。愛菜のフロアに来て課長と仕事の話をしているときに真面目な顔をするのは分かるけれど、息抜きの場である社食に来て毎回違う女性社員とテーブルを囲むときも、彼の表情は一貫して変わらない。彼の傍らにはいつも同じ男性社員の姿があるが、その男性の方がずっと表情が豊かで、女性達とも会話を弾ませていたようだった。湖西は静かに相槌を打つばかりで、積極的に会話に交ざっているところなど見たことがない。人気がある、と有名な人にしては、少し違和感があった。

だから、実は彼は、会社を離れた途端に愛想と色気を振りまくタイプで、美人のお姉さん達はそのギャップに心奪われちゃうのかな、なんて勝手に想像していたのだけれど。あの夜の湖西は、就業中とほとんど変わらない無表情ぶりだ。言葉数も少ないから、何を考えているのかさっぱりだ。

……いやいや別に文句はないよ？ 彼が私に対してどんなことを考えていたとしても。

自分から誘ってきたくせにベッドに上がった途端、ノリの悪くなつたつまらない女、なんて思われている可能性も充分あるし。彼を満足させられた自信なんて一ミリもないし。「でも……優しかった、よね……」

そう、全部が優しかった。

肌を滑る手の動きは細やかで丁寧で、求められるのと同時に労られているような不思議な気分だった。

指先も舌も、急かすことなく愛菜をじっくり溶かしてくれた。

かといつて焦らされたわけでもない。欲しいと思つたタイミンで次の動きに移ってくれるというか……こちらの肌の高まり具合に合わせて進めてくれたというか。

ああいうのを、手慣れた、っていうのかな。

あんなセックスは初めてだったから、正直戸惑わずにはいられなかった。

……おまけにあの表情。

口淫を止められた直後と、彼女の中に入ってきたときのあの顔は——反則だ。

少し眉根を寄せただけ。わずかに目を細めただけ。なのに心臓を打ち抜かれたような思いがした。

一週間経つた今でも、脳裏にがっちり焼きついていて離れない。

もしかして、彼を取り巻くお姉さん達はあの瞬間に彼に落ちるのだろうか。だとした

ら納得しちゃうかも。

経験豊富な美女がコロツといっちゃうなら、経験値の低い自分があっさり撃ち落とされたのも仕方がないことなのかもしれない。

思い出すだけで心が騒ぎ出す。

勝手に火照る頬にペットボトルを当てて、小さな溜息を繰り返した。

「……はあ」

ほんのり甘くて浮ついた感情が愛菜を満たす。が、それと入れ違いにやってきたのは、どんよりとした昏い感情だ。

セックスに手慣れた湖西が相手でも、彼女は喘げなかった。……なら、元彼が悪いんじゃない。やっぱり愛菜自身の問題なのだ。

湖西はさぞがっかりしただろう。自分からホテルに誘った負い目もプラスされて、ただただ彼に対して申し訳ないという気持ちばかりが溢れてくる。

「ただいまー」

グルグルと重い思考に囚われているところに、安倍達が戻ってきた。

顔を上げ、一緒に口角も上げる。

食べ切れなかった物とゴミを一緒に片付けて、笑顔を貼りつけたまま安倍と共にパウダールームへと向かった。

「ね、今晚つて暇？ さつき真野ちゃん達と飲みに行こうつて話になって」  
 パウダールームでメイクを直していると、安倍にそう聞かれた。あの夜、湖西が別れ際に放った一言が頭を過る。

『来週の同じ時間にまたあの店に行く』  
 彼が指定したのは今夜だ。

あのとき愛菜は返事もせずに立ち去ったが、言葉ではつきりと断ったわけではない。ホテルにまでは行かないにしても、あの店に顔を出すくらいはした方がいいんじゃないだろうか。

もしも本当に彼が待っていたら、約束を——したつもりはないけれど——一方的に反故にするようで申し訳ない。店に行つて、彼と会った上できちんと断つた方が。

「……」

「なかちゃん？」

「……違う。」

これは義理立てじゃない。未練だ。

たった数時間一緒にいただけ。たった一度繋がっただけ。なのに、その短い触れ合いがあまりにも鮮烈だったので、気持ちがすっかり湖西に向いている。

自分が求めたのとは一夜限りの相手だったはず。それを忘れて、こんな気持ちのまま二度目を許したら、ずるずる嵌つていきそうで怖い。

「……あれは思い出。」

大丈夫、彼は私の素性を知らない。

このまま日が経てば、きっと印象の薄い女の顔なんてすぐに忘れるだろう。ほとぼりが冷めたら、愛菜と社内ですれ違つても気付かないに違いない。普段たくさんの美人を相手にしている彼ならそのはずだと思つて、あの日彼に声をかけたのだ。

だからこちらもこのまま忘れてしまえ。下手に引きずつてこの未練が重みを増す前に、記憶ごと捨ててしまえ——鏡の中の自分に向かって、愛菜はそう繰り返す。

そして顔を上げ、明るい口調で言った。

「……行こうかな。うん、行く。久しぶりだよね、安倍ちゃん達と飲みに行くの」  
 安倍と鏡越しに目が合った途端、どちらからともなく笑いが漏れた。

愛菜は自然に生まれた笑顔のまま尋ねる。

「メンバーはいつもの四人？」

「もっと増えるよ。真野ちゃんが声かけるつて」

「誰だろう……まさか府木女史？」

「ないわー、それはないわー」



敵しいと評判の先輩社員の顔を思い浮かべながら使い終わった化粧品をポーチに仕舞い、パウダールームを出る。

終業後に健全な予定ができたことで、憂鬱な気分が少し収まった。隣を歩く安倍に心の中で感謝しながら愛菜も足を進める。

席に着くと、スイッチでも押ししたかのようにすんなり意識を切り替えることができた。午後はいつもと変わらず、集中しながら業務をこなしていった。このままいけば、定時で上がれそうだ。

気の置けない友人達との久しぶりの女子会。店を決めるのは真野だろう。彼女は恋人と飲み歩くのが好きで、色々な飲食店に詳しい。彼女に任せておけば安心だ。楽しい友人と美味しい食事に囲まれて、きつと賑やかなひとときを過ごせる。

そんなことを考えながら愛菜はキーボードで文字を打ち込んでいく。

時折お茶で喉を潤して、伸びをして、気分転換に今夜の女子会のことを考えて。胸の奥に湧き上がるモヤモヤを押さえつけ、手元の資料に意識を集中させる。

——そうして午後の時間をやり過ごしたのに。

「お待たせー」

「お、やっと来たか」

真野に案内されて初めて入った店には、予期せぬ待ち人がいた。

「こんばんはー。あっ！ 湖西さんじゃないですかー」

先頭の真野に続いて個室に入った安倍の口から信じられない言葉が飛び出した。

——湖西さん!?

ギクリと固まった愛菜の脇を、堀田がスリリと通り抜けていく。

通路の教歩先、右手にある個室の入り口からは、挨拶や劳いの言葉が軽やかに飛び交っているのが聞こえてくる。

愛菜は一人、その場に立ち竦んだ。硬直したまま動けない。

冷たい風の吹く外から暖房の効いた店に入って、アウトターもまだ着たままだというのに、全身が一瞬で冷えた気がした。

彼がどうしてここに……

先週の店にいるんじゃないの？ こことは真逆の方向にある、あの店に。

私だってあの店に行かずにここに来ている。だから責めるとかそういうつもりはない。でも何故よりによって……じゃない、そもそも……

個室の入り口に立ち尽くす愛菜に気付いて、安倍が中からびよこんと顔を出す。

「どうしたの？」

「安倍ちゃん……今日って女子会じゃ、ないの……?」

掠れた声で投げた問いは、彼女の耳まできちんと届いたらしく、怪訝けげんそうな声が返ってきた。

「違うよ？ 真野ちゃんと、彼氏の千沢せんざわさんがメンバー集めるから男女合同で、つて言わなかった？」

言つてない。

聞いてないー！

当日いきなり声をかけたにもかかわらず結構な人数が集まった、とはここに来る道すがら真野から聞いていたが。女子会だと思ひ込んでいた愛菜にとっては寝耳に水に近い。今更のように終業後の安倍達の様子を思い出した。

メイクを念入りに直していたのはこのせいか。

一日が終わるつていうのに皆女子力高いな、なんてのほほんと考えていた愛菜が間抜けだった。

少し考えれば彼女達の行動が、男性陣の目を意識してのものだつて分かりそうなものなのに。……いや分からないか。特に安倍は普段から気合い入つてるし。

それにしても真野せんざわ彼氏が呼んだ男性陣の中に、今一番会いたくない人がいるなんて……

「か……帰つていい？」

「合コンじゃないつて。なかちゃんも知つてる社内の人ばかりだから大丈夫だよ」

知つてる人だから気まずいの！ ……とはさすがに言えない。それこそ気まずい。

「お酒とご飯とお喋りを楽しむつて目的には変わりないんだから」

ね？ と安倍は小さく首を傾げる。

言葉は柔らかい。けれどその態度は容赦ようしやなかった。

安倍は強引に愛菜の手を引き、二席空いた場所に連れていく。そして戸惑う愛菜を見かねて隣に座つてくれた。

「なかちゃん、女子会だと思つてみたい」

「こ、んばんは。すみません、びっくりしちやつて」

挙動不審きようふせん気味な愛菜に代わつて安倍が皆に説明する。愛菜はとりあえずペコリと頭を下げた。

……いつまでもここそと逃げているわけにはいかない。

同じ会社の男性を一夜の相手を選んだのは自分自身。

今後も数え切れないくらい顔を合わせる機会がある。それは誘う前から分かり切つていたことだ。

本当は、——できることならもう少し日を置いてからが良かった。

せめて湖西が自分の顔を忘れてくれるまで。

でもこうなってしまうたら仕方がない。覚悟を決めないと。

笑みを貼りつけた顔を、恐る恐る上げる。

思ったより大人数だ。安倍達の他にも数人女性がいる。彼女達と同じくらいの数の男性陣の中には、知ってる顔もいくつかあってほんの少しだけホッとした。

——が。

そろりそろりと周囲を見回し、端の席まで確認し終えた愛菜は、困惑しながら眉根を寄せた。

……いない。

湖西の姿がない。

ひよっとして同姓の別人だったのか。でも「コサイ」という苗字はなかなか珍しい。もし社内にも二人目のコサイ氏がいるとしたら、一度くらいは話題に上がるだろう。紛らわしいとかなんとかで。なのに友人達の口からそんな話は聞いたことがない。

けど、安倍はさっき、確かにその名を口にした。

聞き間違えようのないクリアな声で——……

「湖西、さん……？」

口から無意識にその名が零れる。

愛菜のかすかな咳きに、斜め前と隣から同時に反応が返ってきた。

「何？」

「なちちゃん初対面だった？」

「え？」

……意味が分からない。

隣の安倍と、彼女の向かいに座る男性を交互に見る。

「そういうえば、湖西さんがこういう飲み会に来るのって久しぶりじゃないですか？」

「そうだね。今日は千沢の泣き落としに負けた。たまにはいいかなって思ってたさ」

「私の感覚的には、もっと出てもいいと思いますよ。こうして別の課の子と知り合う機会にもなりますし」

にこやかに始まった会話を聞いているうちに、愛菜の混乱に拍車がかかった。

途中、飲み物のオーダーに平静な声で答えられたのは奇跡に近い。

「彼女は中戸さん。同じ課で、私の一期下の後輩になります」

「あ、はい。中戸といいます」

安倍の言葉を受けて、斜め前の席の男性が愛菜にニコリと笑いかけた。反射的に笑みを返せたのは、社会人になってから鍛えられた表情筋のおかげだ。が、次の瞬間、正面に座る女性からきつく睨まれた。

愛菜は彼女とも初対面のはずだ。

なのはどうして敵意を持たれたんだろう。……ああそうか、横に座る彼狙いか。とりあえず、その眼差しはかなり怖いので勘弁してほしい。

牽制したところで、愛菜にはこの男性とどうこうなりたくないなんて気持ちは微塵もないのに……

そこでようやく思い出した。

……愛想が良くて、いつも綺麗な女性を連れていて……そうだ、この人のことは知っている。というか、遠くから何度も見たことがある。

「よく食堂で安倍さんと一緒にいるよね。初めまして、湖西です。よろしく、中戸さん」

そう、食堂でいつも湖西と一緒にいる男性だ——……え？

「こ、さい……さん？」

その名を繰り返すと、安倍が苦笑しながら言う。

「前に教えてあげたじゃない」

「それって褒め言葉と一緒に？」

「ふふふ、どうでしょう」

安倍と男性のお喋りが耳を素通りしていく。

会話の内容に理解が追いつくに近い、動悸が激しくなる。

飲み物はまだ届かない。

唾をこくりと呑み込み、ゆっくり声を出す。

「あの、貴方が、湖西さん……？」

男性は笑顔で頷いた。

「じゃ、えと、いつも食堂で一緒にいる、もう一人の男の人って」

湖西と名乗る彼に、掠れた声で質問をぶつける。

「宮前？ あいつが、どうかしたの？」

「……………」

グルグルと渦を巻いていた思考が一瞬で全停止した。

それでも愛菜の口は勝手に動く。

「……どんな人ですか」

「宮前は良い奴だよ。一言で言えば真面目。あんまり表情が動かないから、つまらない人間とか怖い奴って思われがちだけど、付き合ってみると面白い奴だし。俺かなり好きなんだよね、宮前のこと。だからつい、くっついていつちゃうんだ」

「ええ、意外ですう。宮前さんが湖西さんにくっついてるんだって思っていましたあ」

「逆。俺が宮前の後を追いかけてんの」

「お二人って同期でしたよね？」

「そう」

隣に座る女性と安倍に返事をしつつ、湖西はジョッキを傾ける。

「口数少ないのに一言一言がいつもの確で、新人研修の頃から随分助けられている。あと上司受けもいいんだよな、あいつ。ほら、うちの課長と安倍さんのところの課長って犬猿の仲だろう？ だけど宮前が間に入ると話が上手く進むみたいでさ」

「ああ、それで宮前さん、よくうちの課長のデスクに来るんですね」

安倍が頷いた。

「パシられても文句一つ言わないし、そんな風に余計なことに時間取られても自分の仕事には一切妥協しないし。本人に言ったことはないけど、割と真面目に尊敬してる。あいう奴だから課長に信用されるんだろうな」

湖西による友人贅美が一段落すると、話題は互いの課の課長のことに移る。

けれどそれらの会話のほとんどが、愛菜の耳を素通りしていった。

——花から花へと渡り歩く蝶のように女性との華やかな噂が絶えなくて、ひそかに歩くフェロモンなんて謎なあだ名で呼ばれていて、なのに同性から妬まれることもなく、むしろ慕われるという不思議な魅力の持ち主……それが愛菜の中の湖西像だ。

だからこそ一週間前、彼に白羽の矢を立てた。

彼が噂通りの人物なら一夜の情事に抵抗はないだろうし、そのテクニクで愛菜の悩

みも解決してくれるかもしれない——そう思ってた。

なのに彼は……あの男性は、噂がどうこうという以前に、湖西ですらなかった……

愛菜が衝撃を受けている間も、会話は滞ることなく続いていく。

「……誰が付けたかは知らないけどね、犬課長ってあだ名」

「確かにうちの課長って犬っぽいですが、でも」

「ああ、猿課長の方は、外見とか性格じゃなくて、昔バナナにハマってバナナばかり食べてた時期があつてさ。こじつけだよな。あの人、見た目は猿っていうより虎……って中戸さん、もしかして具合悪い？」

上司の話で盛り上がっていた数人の目が、一斉に愛菜に向いた。が、今の愛菜に笑って誤魔化す余裕はない。飲み物も乾杯の音頭で一度掲げたきりで手つかずだ。愛菜は、とっさに表情を取り繕うこともできず、目を泳がせた。頭の中は一週間前の彼のことで一杯だ。

安倍からも「顔色が良くないかも」と指摘されたのいいことに、化粧室に逃げ込む。鏡に映る自身の顔はかなりひどい。

メイクで誤魔化せないほど真っ青になった顔には、悲愴感と焦燥感がぐちゃぐちゃに

入り混じっている。

でもその最悪な顔と向き合うことで、なんとか覚悟ができた。

席に戻った愛葉は、安倍に声をかける。

「ごめん安倍ちゃん。申し訳ないんだけど私、先に帰るね」

「一人で大丈夫？」

駅まで送ろうかという安倍からの申し出を辞退して、幹事の真野にも一言断って店を出る。

最寄り駅は目と鼻の先だ。

愛葉は冷たい風を頬に受けながら、早足で歩いた。

頭の中を必死に整理する。

まるでデスクの引き出しを丸ごとひっくり返したように思考が混乱していて、どこから手を付ければ良いのか分からない。

無表情。

噂の男性。

少ない口数。

優しい手。

真面目な性格。

一瞬垣間見たあの顔。

「良い奴」——

『なかちゃんホラ、湖西ってあの人だよ』

『え、どの人？』

『二つ向こうの列。秘書課の都筑さんって湖西さん狙ってるのかな。最近一緒にいるの、よく見かけるんだよね』

『あのグループ、男の人二人いるよ？』

『イケメンの方』

『……へー』

社食で安倍達とそんな会話をしたのは、数ヶ月前の昼休みだった。

教えられた方向をチラリと窺うと、少し離れた席に都筑の姿があった。そして彼女の近くに座る二人の男性。

愛葉の目は、そのうちの一方の男性の上で止まった。

彼は、愛葉が自席で作業しているときにたまたま見かける人物だった。

整った顔と動かない表情が美術館に置かれた彫刻を連想させて、こっそり目の保養にしていた他課の男性。

彼の姿をたまたま見られた日はラッキーかもしれない、なんていう妙なジンクスまで作っていた。

その彼が、噂の湖西、その人だったとは――

……なんて、きっちり確認もせず納得してしまったあのときの自分に、タツクルかましてマウント取って往復ビンタをかましてやりたい。

それにしても、自分の美的感覚が他の人とズレてたなんて、今の今まで全然気付かなかった。

確かに、本物の湖西もイケメンだ。背景に花を背負っていてもおかしくない、正統派美形だと思う。

でも愛菜の目には、キラキラ笑顔で物腰の柔らかそうなこの美形より、いつも彼の隣で黙々と食事する、無表情で少し陰のあるクール系美形の方がはるかに魅力的に見えた。見えたっただけ見えた。

正直今だって、間近に見た彼より、先週逢った湖西――もとい宮前の方が断然格好良いと思っっている。

でも……この場でいくら自分に言い訳しても、盛大に人違いしていた事実は変わらな。先週の触れ合いもなかったことにはできない。

「っ、ああああ……」

改札を抜けてホームで電車を待つ間、とてもじゃないがじっとしていられなかった。

今ここに誰もいなかったら、頭を抱えて奇声を発しつつ走り回りたい。太い柱に頭突きしたい。その辺を転がり回りたい。

しかし、帰宅ラッシュの時間帯を若干過ぎたとはいえ、周囲にはまだたくさんの人がいる。こんな場所でそんな奇行に走ったら確実に変人だ。

湧き上がる羞恥と焦燥をグッと堪えてバッグの持ち手を握り締める。

やがてホームに電車が滑り込んでくる。

電車が揺られて向かう先は家ではなく、先週一人でフラツと立ち寄った店。

あの日愛菜は残業で頭が疲れていたせいかな、なんとなく真っ直ぐ帰宅するのが嫌で、乗り換えの駅で降りてぶらぶらと歩いていた。そのときふと目に入ってドアを開けてしまった、あの店だ。

彼が今日店にいるかなんて分からない。約束はしなかった。愛菜の態度を見て、断られた」と思ったのなら、あの店で待つてはいないだろう。

それでも愛菜は、足を運ばずにはいられなかった。遊び人だと思ひ込んで声をかけた相手が、真面目と評される人だったから。この一週間、幾度となく胸に込み上げた罪悪感が、今一気に膨れ上がった。あの数時間は双方の合意の上だった。それは間違いない。でも彼が真面目な人だと知っていれば声をかけなかった。誘わなかった。愛菜自身の問題に彼を——宮前を巻き込んだりはしなかった。

……いきなり誘って、勝手に結論つけて、一度は撥ねつけたくせに、今度は会って謝りたいなんて、ただのエゴだろうか。

もしかして、このまま行きずりの女としてフェードアウトする方が宮前にとっては都合が良い？

——そんな考えに思い至って、ふと歩調を緩める。

遊び慣れた人なら、たった一度きりの相手との関係が切れたって大して気にはしないだろう。そう考えたからこそ、愛菜は思い切って行動に出た。

けれど噂の湖西だと思っていた男性は、別人だった。

真面目な男性なら、こういうときどんな風に考えるんだろう。サラッと忘れてくれるのか。それともいつまでも気にする？

……それ以前に私、謝る。って、何をどう謝るつもりなの？

『貴方あなたのこと遊び人だと思ってました。別人と勘違いしてごめんなさい？』

「ああああああ……」

これはどう考えてもマズい。

もし愛菜が同じ勘違いをされたとしたら、ドン引きすら飛び越えて一生顔を見たくなくなるかもしれない。

言えない。真実は隠し通したい。——嫌われたくないのだ。

その他大勢の扱いでもいい。意識されなくても構わない。だけどマイナスイメージは持たれたくない、彼には。

同じ会社に勤めていて、毎日ではないけれど顔を合わせる機会がゼロじゃない男性だから。

真面目な人なら、一回でも肌を合わせた女の顔をそうそう忘れたりしないだろう。馬鹿なことをした。

できることなら過去に戻って先週の自分を背後から蹴り飛ばしたい。

後悔先に立たずとはよく言ったものだ。

「……あれ、……」

気が付くと、愛菜はいつの間にか目的の駅で降りて、随分遠くまで歩いてきていた。慌あわてて来た道に戻る。だが愛菜はこのあたりに詳しくない。だから、どこをどう歩い



てきたのかも覚えていない。

今度は別の意味で青ざめる。

「うそ……ここどこ……」

愛菜はかなりの方向音痴だ。歩き慣れた近所ですら、一本道を間違えると途端に進むべき方向が分からなくなる。地図アプリを片手に西の目的地に向かって進んでいたのに、何故か東にいた、なんて冗談みたいな経験も多い。

頭が疲れたときに無性に放浪したくなるのも悪い癖だ。けれど普段は迷うのが怖いから、目立つ建物を目印にしながら、ごく狭い範囲を散歩している。

先週もそうやってぶらついていて、駅から近い雑居ビル群の一角にあるあの店を見つけたのだ。

それはともかく、問題なのは今だ。

……多分、右折も左折もしていない。横断歩道は何度か信号待ちして渡った気がする。つまり、道なりに真っ直ぐ歩けば駅に戻るはず——

冷たい風と足元に漂う冷気に身を縮こまらせながら、愛菜はスタート地点の駅を目指した。

宮前のことは一旦頭の隅に押しやる。こんな寒い中、不慣れな街を深夜まで彷徨うなんて、シャレにならない。

タイムリミットは終電の時間までだ。

それまでに、どうにか見覚えのある場所まで辿り着かなきゃ……

——そこから迷いに迷って交番を発見した。

駅までの一番分かりやすいルートを教えてもらって、頭に叩き込む。

書いてもらった手描きの地図と何度も睨めっこしてようやく駅に戻って来たときには、つい泣きそうになった。

「何やってるんだろ、私……」

歩き回って心身ともにくったりしていた。こんな状態で、一度しか行ったことのない店を探す気力はさすがに生まれえない。今無理をしたら確実に遭難する自信がある。

ホームのベンチで愛菜はがつくり項垂れた。

情けない。やるせない。どうしようもなく切ない。

バッグの中でスマホが鳴った。通話ボタンを押すと電話の向こうで安倍の声が響く。

安倍でふと涙腺が緩んだ。

うっかり湿った声で返事をしてしまう。

すると、『そんなに具合が良くないの?』と心配そうな声が返ってきたので、愛菜はますます泣きたくなった。

先週ホテルでの別れ際に告げた通り、宮前は彼女と出逢ったバーに足を運んでいた。しかし彼女は時間が過ぎて姿を現さない。腕時計はもう零時を指そうとしている。

『やはり来ないか』と納得する一方で、『もう少し待てば来るんじゃないか』と期待する気持ちも捨て切れない。それどころか、少しでも来る可能性があるなら待つていようとすら思う。日付が変わる頃までこうして粘っているのは、そんな意地にも似た思いからだ。

……独りで飲むのは割と好きだ。

家で飲むのも悪くはないが、片付けが億劫なときはよく外に出る。お気に入りの店もいくつかあった。

そのうちの一軒であるこの店は、半年ほど前に同僚の湖西から教わった。

宮前は、独りで飲んでいると女性に声をかけられて面倒な展開になることが多い。遊び相手を求める女性達の目には、宮前は都合の良さそうな男として見えるようなのだ。

彼女達は勝手に擦り寄ってきて、甘えた声で意味深な言葉を囁き、遠回しな誘いをかけてこちらの反応を待つ。

そしてこちらの誘いがないと知ると、プリプリ怒って離れていく。

男なら自分の誘いに乗るはずだと言わんばかりの自信はどこからくるのかと、一度でいいから尋ねてみたいものだ。余計に面倒なことになりかねないので実際に口にしたことはないが。

そんな宮前にとって、女性が好みそうにないこの店の立地や外観はかなり魅力的だった。

店主には失礼かもしれないが、雑居ビルの中で、さらびやかな外観の他店に埋もれるようにして存在していたこのバーは、言わば「男の隠れ家」のような店だ。内装も落ち着いた雰囲気で、とても居心地が良い。他の客も宮前と似た嗜好なのか、一人で静かにグラスを傾ける男性客ばかりだ。

しかし、先週は珍しく女性の先客がいた。

カウンター席に座り、手元のグラスに視線を落としてぼんやりしていた女性は、二つ席を空けて腰を落ち着けた宮前の気配にふと顔を上げて——目を大きく見開いた。

心底驚いた様子にこちらでも少々面食らったが、何か話しかけられる気配はない。

内心首を傾げつつも、マスターに注文を告げて静かに酒を楽しんだ。